



古くて新しい 結婚式のカタチ

キツカケのキツカケ

早良組西宗寺で仏前結婚式が執り行われました。西宗寺ご門徒の亜里沙さんとオーストラリア在住のギャリーさんの国際結婚。二人にはそれぞれの地元で結婚式を挙げたいという想いがありました。「オーストラリアではウェディングドレスを着て人前結婚式を行うことになっていたの、日本ではより日本らしく、白無垢を着るような式がしたい」と思いました。「その想いを母親に相談したところ、「いつもお世話になっているお寺さんでやったら?」というその一声がキツカケでした。「幼いころから子ども会などお寺には何度も行ったことがあったし、納骨堂もあるので亡くなったおじいちゃんやおばあちゃんが一緒のような気がして」とお寺での仏前結婚式を決意されたそうです。

亜里沙さんに仏前結婚式を勧めた母親も思いつきで勧めた訳ではありませんでした。数ヶ月前に「早良組仏前結婚式のつどい」で行われた模擬仏前結婚式を思い出されたそうです。「そのとき初めて仏前結婚式を知りました。娘に相談

仏前結婚式 というカタチ

されたときにその光景を思い出して、これも何かのご縁と感じ勧めたんです。」
亜里沙さんの母親のように仏前結婚式というカタチを知らない人は多いのではないのでしょうか。日本人らしい和装の結婚式と言われると、神社などで行う神前結婚式を想像します。家に仏壇があり、お盆やお葬式はお寺で勤めても結婚式をお寺で行うという認識はあまり一般的ではないようです。しかし、その認識が今変わろうとしています。

ギャリーさんも最初に仏前結婚式と聞いた時は「なにそれ?」という印象だったそうです。ギャリーさんは日本への留学経験があり、日本の文化については多少なりとも理解があったそうですが、「仏前結婚式」という言葉は初耳



第26回 全国仏教 壮年福岡大会

平成26年10月25日(土)
福岡国際会議場



平成26年10月25日(土)福岡国際会議場におきまして、専らご門主ご臨席のもと「朋友の輪を拡げ」ともにのちかがやぐ世界を」を大会テーマに、第21回全国仏教壮年福岡大会が開催されました。2500名を超える参加者とともにお勤めしたお正信偈の声は厳かな雰囲気の中、会場一杯に響き渡りました。調声をして頂いた明法寺・照安寺の方々、ご指導頂きました御笠組の和田住職、本当に有難うございました。



早良組子ども報恩講

2014年12月26日(金) 明性寺にて

親鸞聖人のみ教えに触れてもらうため昨年の十二月二十六日、子ども報恩講を明性寺でおこない約六十人が参加しました。お勤めをするために最初に子どもたちの手で腕輪念珠を作りました。色とりどりのユニークなお念珠ができあがりしました。その念珠を使って雅楽の演奏する中、献灯・献花・献香を行いました。おつとめさせていただきました。

早良組 青少年部



キッズサンガってどういう意味?!

キッズ(kids)は「子どもたち」、サンガ(sangha)は「仏教徒の集団」の意味があります。これをあわせた造語で「お寺に集う子どもたち」という意味で名付けました。

さわら 今昔物語

～菩提樹山 教善寺～
福岡市早良区小田部

早良組の昔の様子を垣間見るシリーズ「さわら今昔物語」。今回は早良区小田部『菩提樹山 教善寺』の昔をご紹介します。



上/昭和40年頃の教善寺
右/昭和33年頃、教善寺より西福岡中学校を望む

左/現在の教善寺本堂
下/昭和15年頃の教善寺本堂

現在では見えにくくなっているが、当時教善寺の南側は遠くまで田畑が広がっており、西福岡中学校の全貌を見る事ができた。

また、少し高台になっているため、次郎丸や橋本周辺からも寺院を望む事ができたそうである。



組内向け、寺院にご縁のない人々に向けての情報、また、ご法義の発信など。

早良組だよりへの取材のご依頼・お問合せは、栄福寺内 ☎851-9656 まで

だったようです。親族一同も同じ印象で、みな聞きなれない言葉に興味津々でした。「むしろ私の友人の方が驚いていました(笑)」と垂里沙さん。それぞれの反応が窺えます。

私たちの名前が出てきてびっくり

お二人に最も印象に残っている場面を尋ねると、二人とも「お経の

中に私たちの名前が出てきたときは驚きました。」という事でした。実はこれ、「表白(ひょうびやく)」といい「今からこのような趣旨でお勤めを致します」と阿弥陀様に申し述べる文章です。法事やお葬式では参加している人の名前が入ることはありませんが、慶事となると参加している方のお名前が入ります。お経が少し身近になる瞬間だったのかも知れませんね。

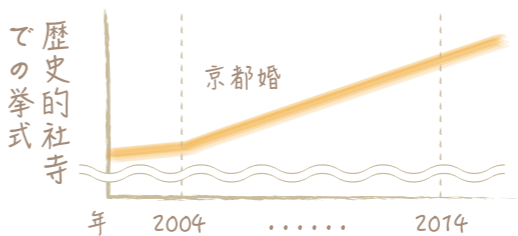


結婚式の実際

今回、歴史的建造物での結婚式が増えているということを紹介致しました。しかし、仏前結婚式の数自体はまだまだ少ないというのが現状です。現在日本では多くの人がキリスト教系の教会で結婚式を挙げられています。しかし、文化庁の統計によると日本人が帰属する宗教の分布は仏教系が約8500万人、神道系が約1億人となっています。つまり、日本人の大半が仏教か神道、あるいはその両方に帰属しているようです。教会で結婚式を挙げる夫婦の多くがキリスト教徒ではないように、現在の日本では結婚式における宗教性は薄れてきています。垂里沙さんご夫婦のように、自分に合った結婚式のカタチを模索するのも良いのではないのでしょうか。

仏前結婚式ブーム到来!?

今、歴史的建造物での結婚式が増えています。中でも神社仏閣が集中する京都での「京都婚」は人気で、昨年発行された宗報(2015年1月号)によると、上賀茂神社での挙式は10年前の3倍。二条城では5年の間に2.5倍に増加。関係業者は「孫の代まで残る歴史的社寺などの文化的価値が重視されているのではないかと分析しています。近年テレビや雑誌など各メディアで「個性」という言葉が度々取り上げられます。若い世代は平均的であることよりも「個性的」であることを重視しているように思います。その意識が歴史的建造物での挙式増加の一つの要因でしょう。私たちの地元にも何百年と歴史のあるお寺がたくさんあります。お家にお仏壇があり、子どものころにお寺の行事に参加した経験があるという方も多いのではないのでしょうか。お寺は法事や葬式を行う場所というイメージが強いですが、今回ご紹介した「結婚式」のほかにも出産のお祝いである「初参式」や「成人式」と慶事も多くあります。法事やお葬式だけでなく、うれしいご縁をお寺で過ごすのも良いのではないのでしょうか。



お念仏とともに

〜鳥飼和子さんに聞く〜

「どんな人生を送ってこられましたか」こんな問いかけから始まりました今回の「お念仏とともに」。「苦勞」なんて簡素で使い古された言葉では語れない、これまでの半生。そんな中で何が人生の支えになったのか。明光寺のご門徒・鳥飼和子さんにお話を伺いました。

幼少期(厳しい鞭)

母は長女の私を小学校の先生にしたいと願ってくれていたようです。その願いが通じたのか、私は小学校で級長までさせていただき、親子5人温かい家庭の中、何不自由無い生活を送っていました。

石釜の大火事で家を失ったのは、私が小学三年生の時です。当時はどこも茅葺き屋根でしたから、火は風に乗って、瞬く間に数十件の家を燃やしました。

失意の中、親戚のお宅にお世話になり、しばらくして脇山農協の裏手の家に住み始めました。母の体調が悪くなったのはこの頃からです。その内大東重戦争が始まりました。何の苦勞も知らなかった私に、火事・母の病氣・戦争という大きな問題が私の人生に降りかかって来たのです。

私は進学するのを諦めて、中学二年から家の手伝いをする事を決心しました。

青年期(仏教青年会との出会い)

父は農協の仕事を辞め、炭焼きの仕事をしていましたので、その手伝いです。夜明け前に家を出て、帰りは炭二俵を背中に背負い帰ってくる。そんな生活を送っていました。

そんな時期に、石釜・光明寺の平川令城先生(前々住職)が仏教青年会なる集いに誘ってくださいました。十七歳の事だったと思います。

初めて聞く仏さまのお話に、私は身を乗り出して聞かせていただいた事を思い出します。

どん底のどん底に這いずりまわった辛い青春が、実は如来さまのお手回しで、この南無阿弥陀仏のご縁に遇わせるための苦しみであり、悲しみであったのか。その時の感動は今でも忘れられません。

母の死

私が十八歳の時、八年間病に苦しんだ母が亡くなりました。長患いしてましたからね、不思議と悲しさよりも安心したことを覚えています。しばらくして、母が亡くなる直前に書いた手紙が出てきました。最後は目も見えなくなった母が、力一杯書いた手紙です。その最後にこう記されていました。

「子ども達の成長する姿、花嫁の姿

を見られないのが残念ですが、お浄土できっと見えています。これはお母さんの願いよ。み仏さまを信じて生きていつてちょうだい」

私はこれを読んで、最後の言葉を胸に抱いて、一生懸命歩む事を決意しました。

南無阿弥陀仏は母の命。母の願いのかけられた南無阿弥陀仏とは一体どういうことなのか。それから私の間法が始まったのです。

武内洞達先生との出会い

石釜の仏教青年会の活動に参加してしばらくして、糸島・徳正寺の仏教青年会と交流会が始まりました。ここで恩師と言いますか、父親の様な方と出会いました。徳正寺の武内洞達先生(前々住職)です。いや、父親以上でしょうね。

平成十六年に亡くなられるまで、五十五年間数々のお育ていただきました。時間が許す限り、先生が行かれる先まで、お聴聞をさせていただきました。今で言う「追っかけ」ですね。ありがたいお育てでした。

その武内先生から、臨終説教が出来るようになりなさいと教えられた事があります。臨終説教とは、今死にゆく人の前で仏さまの話をすることです。今から数年前、実際に近所の方がよい臨終を迎えられるというご縁

血流

私は思うのです。私の体は阿弥陀さまの血が、血流が流れているのです。お念仏をいただくということは、私のはらわたの中に阿弥陀さまのくさびが刺さって下さるのだと思います。

今までどん底のような苦しみも悲しみもありました。その度私には一緒にしてくださる阿弥陀さまのお慈悲を受け、生かされてきました。阿弥陀さまの親としての「くどさ」でしょうね。一度や二度のご縁では駄目だどこぞ存知なんです。重ね重ねのご苦勞にお礼を申すばかりであります。



取材後記

お寺離れと言われているこの時代、「阿弥陀さまをこんなに喜ばれる方はなかなかいません。早良の宝です」と伝えましたら、「私は宝ではありません。如来様から宝をいただいただけです」こう返され、私は自身の軽率な発言を恥じました。しかし考えてみますと、私もまた「如来様から宝をいただいた一人」であったのだと何だか嬉しく、鳥飼和子さんの自宅を後にしました。

